

ここがすごいよ

『日本書紀』

—神道古典の王様—

『日本書紀』は令和二年（2020）で

撰上 1300 年！

『日本書紀』は養老^{ようろう}4年（720）年に撰上^{せんじょう}されました。令和2年でちょうど1300年になります。「撰上」とは編纂して天皇陛下に献上することです。『日本書紀』は元正^{げんしょうてんのう}天皇に撰上されました。ちなみに『古事記』は和銅^{わどう}5年（712）に元明^{げんめいてんのう}天皇に撰上されました。『古事記』は『日本書紀』より8年古く、現在では『日本書紀』よりもメジャーです。しかし、『古事記』が広く読まれるようになったのは、江戸時代後期に本居^{もとおりのりなが}宣長（1730～1801）が著した『古事記伝』という『古事記』の注釈書の影響です。それまでは、『日本書紀』は神道古典の王様でした。

例えば、日本で一番早く「神道」という言葉を使った書物は『日本書紀』です。卷第二十一の用明^{ようめいてんのう}天皇の条に、「天皇信仏法尊神道」とあり、これがわが国の文献上での初出です。

「同じ日本神話の本だから『古事記』だけ読めばいい」という人もいますが、『日本書紀』を知れば神道がもっと理解できるようになります。

『日本書紀』はなぜメジャーじゃないのか

江戸時代まで主流だった『日本書紀』ですが、今では『古事記』の方が人気です。神道に興味があって『古事記』は読んだけど『日本書紀』に手を出していないという人も多いです。なぜか？

その大きな理由に『日本書紀』の構成が複雑だということが挙げられます。『古事記』は話の流れが一本です。しかし、『日本書紀』は途中で異なる伝承が挿入されます。「一書に曰はく」と書かれた部分で、これは「次のような異なる伝承もあるよ」という意味です。本文の途中で、別の伝承が挿入される訳ですから、「あれ？ここの記述と前の記述が矛盾しているぞ」と読者は混乱してしまいます。しかも、この「一書」は神代に多い。

例えば、『日本書紀』本文では、最初に現れた神を^{くにのとこたちのみこと}国常立尊と書いていながら、一書として最初に現れた神を^{あめのとこたちのみこと}天常立尊とする説や^{うましあしかびひこぢのみこと}可美葦牙彦舅尊とする説も掲載しています。そうすると読者は「結局、最初に現れた神様はどなたなの？」と迷ってしまふ。これに対し、『古事記』では最初に現れた神は^{あめのみなかぬしのかみ}天之御中主神で一貫しているから混乱することがない。そのため、話の流れが一貫していて理解しやすい『古事記』の方が人気なのだと思います。

一書はなぜ存在するのか？

「混乱するだけだから、一書はいらないのではないか？」と思う人もいるでしょうが、複数の異なる説があり、決定的な証拠がない場合に、無理やり一つの説に絞るのではなく、異説を残しておくことは歴史を語る上で大切な姿勢です。

十年前のことを友人と話していて、お互いの記憶が食い違うということは一般でもよくあります。口論しても証拠や記録がなければ、どっちが正しいかわからない。『日本書紀』が撰上された時から数えて、神武天皇即位元年は1380年前です（神武天皇の御即位は西暦に換算して紀元前660年前です）。古代は文字で記録するのではなく、口伝で歴史を伝達していました。そうすると、『日本書紀』を編纂しようとした時にはすでに氏族によって伝承に食い違いが生じていました。決定的な証拠がない状況で無理に決めるとなると、政治力の強い豪族の伝承が優先されてしまいます。しかし、実際には弱小氏族の伝承の方が正しい可能性もある。だからこそ、編纂するにあたり有力な伝承を本文（通説）とするけれども、異説の方が正しい可能性もあるので一書として残しておくことにしたのです。異説への寛容、史実・伝承への真摯な姿勢がここにあります。

『日本書紀』は日本初の正史

『日本書紀』は国家事業として編纂され、その責任者は
てんむてんのう とねりしんのう
天武天皇の第三皇子の舎人親王です。対して『古事記』は舎人の
ひえだのあれ おおのやすまる
稗田阿礼が暗誦していた諸伝承を太安万侶が筆記したものです。
このように国家から見た両書の位置づけは明確に異なります。

『日本書紀』は国家の正史であり、『古事記』は皇室の由緒を示した縁起といってもいいでしょう。

『日本書紀』の以降、五つの正史が編纂されました。『続日本
ぎ にほんこうき しょくにほんこうき にほんもんくてんのうじつろく にほんさんだい
紀』・『日本後紀』・『続日本後紀』・『日本文徳天皇実録』・『日本三代
じつろく りっこくし
実録』です。『日本書紀』と合わせて「六国史」といいます。

一般に『延喜式』^{えんぎしき}神名帳に記載された「式内社」^{しきないしゃ}は有名ですが、
「式内社」ではないものの、六国史に記載された神社を「国史
げんざいしゃ
現在社」と呼び、こちらも古く由緒ある神社として昔から重んじ
られてきました。「国史現在社」は「国史見在社」や「国史所載
社」ともいいます。

国家の正史ですから、朝廷の行事として講義（日本紀講筵）^{にほんぎこうえん}や
宴（日本紀竟宴）^{にほんぎきょうえん}が開かれました。その成果は鎌倉時代に『釈日本紀』
としてまとめられています。日本の正史であることが江戸
時代後期まで『日本書紀』の方がメジャーだった大きな理由です。

『日本書紀』はインターナショナル

『日本書紀』と『古事記』は形式や文体なども大きく異なります。

『日本書紀』・・・漢文体・30巻

『古事記』・・・和漢混交体・3巻

和漢混交体というのは、漢字の音を用いる音仮名方式と意味を用いる訓字方式を交えた独特なもので、古代の口承文化を伝えるのに適しているという長所がありますが、当時の知識人でも読みにくく、ましてや外国では通用しません。他方、漢文は中国でも通用し、また三十巻という構成は中国の歴史書の『漢紀』や『後漢紀』と同じです。つまり『日本書紀』とは当時の国際社会に対し、国際的な形式を採りつつも、日本の独自性を主張した歴史書だといえます。それは当時の中国が用いていた「倭」ではなく、「日本」を書名に冠したことからも明らかです。今でいえば、英語で日本の歴史を主張するような国際社会を意識した書物だった訳です。

結局、『古事記』と『日本書紀』 どっちを読めばいいのか

ここまで『日本書紀』と『古事記』を比較してきましたが、どちらが優れているという訳ではありません。どちらも重要な神道古典です。ただ『日本書紀』は『古事記』に記載されていないことや別の伝承を多く掲載しているため、『古事記』を読んだから日本神話は理解したというのは間違いです。両方を読むことで確実に神道に関する理解が深まります。古語の保存に努めた『古事記』と異説・別伝の保存に努めた『日本書紀』の相乗効果があるからです。

また、同じ神様でも『古事記』と『日本書紀』で漢字が違うことがあります。だから事典だと『古事記』・『日本書紀』に出てくる神様のお名前はカタカナで表記し、文中で『古事記』ではこの漢字、『日本書紀』ではこの漢字で表記すると説明することが多いです。

あなたの身近な神社（氏神神社、崇敬神社）の御祭神の表記は『古事記』に準拠していますか？それとも『日本書紀』に準拠していますか？こうした点を調べるのもおもしろいかもしれません。

御祭神の表記の一例

①神武天皇（じんむてんのう）

【日本書紀】神日本磐余彦天皇

（かむやまといわれひこのすめらみこと） ※和風諡号

【古事記】神倭伊波礼毘古天皇

（かむやまといわれびこのすめらみこと） ※和風諡号

②応神天皇（おうじんてんのう）

【日本書紀】誉田別尊（ほむだわけのみこと）

【古事記】品陀和氣命（ほむだわけのみこと）

※「神武天皇」や「応神天皇」は「漢風諡号」といい、『古事記』・『日本書紀』の成立以降に撰上された尊称です。『古事記』・『日本書紀』では「神日本磐余彦天皇」など和風諡号で表記されています。

③イザナギ

【日本書紀】伊弉諾神、伊弉諾尊

【古事記】伊邪那岐神、伊邪那岐命

神道古典とは何か

「神道古典」とは「とくに神道の本質が語られている文献」であり、「しんてん神典」ともいいます。

昭和 11 年、大蔵精神文化研究所が『古事記』・『日本書紀』・『こごしゅうい古語拾遺』・『なかとみのよごと宣命』・『りょうのぎげ中臣寿詞』・『しんせんしょうじろく令義解』(抄)・『延喜式』(抄)・『ふどき新撰姓氏録』・『まんようしゅう風土記』『万葉集』(抄)を収録した『神典』を発行しました。この『神典』が人気だったため、これらのみを「神典」だと思っている人もいるかもしれませんが、『神典』に掲載されない古代の儀式書や後世の神道に関する文献や文書も広い意味では「神典」です。

そうした神道古典のなかにあつて、『日本書紀』は基本中の基本の書物でした。伊勢神道も吉田神道も垂加神道も国学も『日本書紀』は読んでいて当たり前の本であり、『日本書紀』を読まなければ、これらの諸派の神道理論は理解できません。『古事記伝』の著者である本居宣長も『古事記』・『日本書紀』の二典を繰り返し繰り返し読むことが、神道を学ぶ基本だと『うひ山ぶみ』で説いています。この『うひ山ぶみ』は宣長が神道研究をはじめた初学者用に書いた書物です。

神道古典の心得

『日本書紀』は歴史書であり、神道を布教するために書かれた書物ではありません。しかしながら、神祇を敬うことは日本人にとって特殊なことではなく、日常のなかに神道が溶け込んでいます。神代や上代であればなおさらです。そのため『日本書紀』が記す歴史のなかには神道の本質が含まれているのであり、読み解く力があれば最高の神道古典となる訳です。この読み解く力の源は「神様について知りたい」、「神道について知りたい」という想いです。同様のことは参拝についてもいえます。神を敬う心がなければ、神社に詣でても、神祇は応えてくれません。敬神の念があるからこそ参詣であり、敬神の心がなければ観光です。

中世の神道家である吉田兼よしだかねとも俱は「神道に書籍なし。天地をもって書籍とし、日月をもって証明となす」と言っています。敬神の心をもってものを見る力を極めれば、山川草木、観るもの全てが神道古典になります。ただし、一方で兼俱自身は古典を重んじた人でもあり、やはり正確な知識を古典や先人の説から学び、基礎を身につけなることが大切です。

三大神勅

『日本書紀』の内容で信仰上、特筆すべき点をいくつか紹介します。まず神道のみならず、日本国の基本的な形をつくったのが、三大神勅です。この神勅は『古事記』ではなく、『日本書紀』が出典です（訓読は大倉精神文化研究所『神典』に拠る）。

【天壤無窮の神勅】

とよあしはらのちいほあきのみずほのくに　こ　あ　うみのこ　きみ　べ　くに
豊葦原千五百秋之瑞穂国は、是れ吾が子孫の王たる可き地な
り。よろ　いましめみま　ゆ　し　さきくませ　あまつひつぎ　さか
宜しく爾皇孫就きて治らせ。行矣。宝祚の隆えまさ
むこと、まさ　あめつち　きわまり　な
当に天壤と窮無かるべし。

【宝鏡奉齋の神勅】

あ　みこ　こ　たからのかがみ　み　まさ　あれ　み
吾が見、此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとく
すべし。とも　みゆか　おな　みあらか
与に床を同じくし殿を
ひとつ　いはひのかがみ　な
共にして、齋鏡と為すべし。

【齋庭稻穂の神勅】

あ　たかまのはら　きこしめ　ゆにわ　いなほ　も　またあ　みこ　まか
吾が高天原に所御す齋庭の穂を以て、亦吾が見に御せまつ
るべし。

五大神勅

三大神勅に次の神勅を加えて五大神勅とといいます。

【侍殿防護の神勅】

ねが いましふたはしらのかみ またおな みあらか うち さもら よ ふせ
惟はくは 爾 二 神、亦同じく 殿 の内に侍ひて、善く防
まも な
ぎ護ることを為せ。

【神籬磐境の神勅】

あれ すなは あまつひもろぎまたあまついはさか た まさ すめみま みため
吾は 則ち天津神籬及天津磐境を起樹てて、当に吾孫の 為に
いは まつ いましあめのごやねのみこと ふとだまのみこと よろ あまつひもろぎ たも
斎ひ奉らむ。汝 天見屋命・太玉命、宜しく天津神籬を持
あしはらのなかつくに くだ またすめみま みため いは まつ
ちて、葦原中国に降りて、亦吾孫の 為に斎ひ奉れ。

以上の神勅は『古事記』だけでは知ることができません。これらの神勅は『日本書紀』だけに留まるのではなく、後世に多大な影響を及ぼしました。神社に関して興味深いのは、神籬磐境の神勅で高天原の祭祀と我々の祭祀がリンクしていることが書かれており、後世の神道家に影響を及ぼしました。例えば、垂加神道には神勅を基にした「神籬磐境伝」という奥秘があります。

惟神

^{かんながら}
惟神とは『日本書紀』大化三年の条に出てくる用語で、そこには割註で説明が付されています。原文は「惟神者 謂隨神道亦謂自有神道也」で、一般には「惟神は神道に隨うを謂う。亦、おのずからに神道有るを謂う」などと訓読されます。

「かむながら」の「な」は格助詞で、「がら」は「人柄」の「柄」などと同じ「本性」などを意味する言葉です。そのため「神のままに」、「神として」、「神であるがゆえに」、「神の意志のまにまに」などと解釈されています。

神道の本質に迫る重要な用語として近世以前から注目されて、様々な解釈がされています。そのため、出典が『日本書紀』であり、原文を覚えておくことは神道理解の上で有益です。

明治以降は主として「惟神の大道」という言葉が用いられました。こちらは「神道」、特に教派神道を含めず、神社神道のみを指す言葉として用いられることが多いです。

「隨神」、「神隨」、「神在隨」、「神長柄」、「乍神」などの漢字が用いられることもあります。

全体を繰り返し読み返すことの重要性

『日本書紀』に記載された神道の重要な箇所・用語を紹介しました。しかし、神勅を暗記したからといって『日本書紀』の全てを理解したことにはなりません。重要な部分だけを読むのではなく、全体を繰り返し読み返すことによって神道の理解が深まることは、本居宣長が指摘する通りです。

『日本書紀』の楽しみ方としては、『日本書紀』の全体を読んだ後に北畠親房の『神皇正統記』^{じんのうしょうとうき}などの中世・近世の神道に関する書物をひもとけば、『日本書紀』を読まない場合よりもはるかに深く理解することができます。

また、参拝した神社の御祭神について、祭神名が『古事記』に準拠しているのか、『日本書紀』に準拠しているのか、『古事記』の記述と『日本書紀』の記述の相違などを調べてみると、参拝がますます楽しく有意義なものになります。

全三十巻を読むのは大変という方は、興味のある巻から読んでもいいかもしれません。神代巻（上下）と神武天皇紀の三巻だけでも神道の理解が相当深まりますよ。

舎人親王

『日本書紀』の編纂責任者だった舎人親王は天武天皇の第三皇子で、優れた政治家で、同時に歌人でもありました。『万葉集』には詠歌が三首も掲載されています。

『日本書紀』の編纂は天武10年(681)から養老4年(720)までの39年間もかかった大事業でした。舎人親王の他に、紀清人きのきよひとや三宅藤麻呂みやけのふじまろらをはじめとした多くの官僚や史官も編纂に従事しました。自分の一族を実際よりよく書いてほしいと思う豪族はたくさんいた訳ですから、漢文に関する知識はもとより明確な国家観、人望、統率力や調整力がなければ、『日本書紀』を完成させることはできません。その高邁な人柄を慕う人々により多くの神社で舎人親王は祀られています。

また、のちに王子の淳仁天皇が即位されたことで、「崇道尽敬皇帝」すどうじんきょうこうていの尊称が贈られています。江戸時代の杉浦すぎうら国頭くにあきら(遠江国浜松の諏訪神社の神職)は、舎人親王を尊敬し、その一千年祭を斎行するとともに、「尽敬会」という名の『日本書紀』の勉強会を開催しました。杉浦の教え子が国学者のかものまぶち賀茂真淵で、真淵を師と仰いだのが本居宣長です。

日本書紀の写本

書物は長い年月で紙が劣化し、あるいは火事や風水害によって原本が失われてしまうことがほとんどです。和銅 5 年に撰上された『日本書紀』の原本も残っていません。『日本書紀』に限らず、ほとんどの古い書物は原本ではなく、途中で誰かが手で書き写したものが現代に伝えられています。

『日本書紀』の古い写本は、神社や大学・博物館に収蔵されています。神社関係では伊勢の神宮文庫、熱田神宮、北野天満宮所蔵の写本は重要文化財に指定されています。なかには奈良国立博物館や京都国立博物館の写本のように国宝指定を受けているものもあります。

印刷技術が確立されていない時代、本は手で書き写すしかありませんでした。世の中には原本も写本も失われたため、今では読むことが出来ない書物もたくさんあります。今、『日本書紀』を読むことが出来るのは、書写した人々の努力のお蔭です。

また戦国乱世から太平の世に移る文禄・慶長年間、後陽成天皇の思し召しにより『古文孝経』、『勸学文』、『錦繡段』などが刊行されました。これらを慶長勅版といいます。その一つとして『日本書紀神代卷』が上梓されていることから、『日本書紀』がいか

【主要参考文献】

大倉精神文化研究所編『神典 普及版』

(神社新報社、初版昭和 11 年)

國學院大學日本文化研究所『神道事典 縮刷版』

(弘文堂、平成 1 1 年)

※神社新報社 (<https://books.jinja.co.jp/>) にて
取り扱っております。

【わかりやすい『日本書紀』の解説書】

神社本庁監修『神話のおへそ『日本書紀』編』

(神社検定公式テキスト、扶桑社、平成二十八年)

※日本文化興隆財団 (<https://www.nihonbunka.or.jp/>)
にて取り扱っております。

ここがすごいよ 『日本書紀』 —神道古典の王様—

編集 神道青年全国協議会教化委員会

(文責 委員長 河村忠伸)

発行 神道青年全国協議会

刊行 令和2年10月28日

本書は『日本書紀』撰上1300年を記念し、一般向けに興味をもってもらくことを目的として企画されたものです。